

ペン俳句会 句会報(三三七号)

令和四年十月六日(木)

兼題『夜長』『長き夜』、席題『実』

寒雨を想わせる午後、日本倶楽部にて開催。

浜口 須美子

亡き義母の日記に我が名秋灯し

実よ爆ぜよ命の限りを生きる母

目も耳もと疎きを数え長き夜

子ら巢立ちあの日の喧騒聞く夜長

長い夜エンディングノート書き直す

松田 一文字

鳥の来て騒ぐ実ひとつ木守柿

問題の解けてコーヒー夜の長し

赤とんぼ浮いては止まり竿の先

竹藪の影くつきりとけふの月

湿原に映える紫紺や鳥かぶと

大津 そうかい

老いの日の虚実のあはひ蚯蚓鳴く

秋彼岸の流儀のちらし鮎

打明けて針の筵となる夜長

内職の手許はや暮れ雁渡る

蒸かし諸親の辛労分かる歳

高橋 由紀子

天高し服さまさまの草野球

草野行けばひよんと飛び出すバツタの子

ムクロジの実は熟したり深大寺

辛き友とただ座りをり長き夜

名月をゆるりと一機横切れり

長尾 進一郎

台風とコロナ尻目に旅支度

ホシは誰ページ止まらぬまま夜長

酸っぱいらし梨の実残し雀去る

秋風の野山をあとに街を訪ふ

女王儂ぶ長蛇の列を見て夜長

森田 元斐

旭日に映ゆる稲穂や美し国

鼻高の妖しき埴輪秋深む

夜長し駅の向ひの縄暖簾

廃線の虚実飛び交ひななかまど

ハイウエーのよぎる貝塚木の実降る

首藤 しずを

秋澄むや隣駅より発車ベル

赤き実は土産代はりか小鳥来る

しら鳥を遠くに浮かし水の秋

ことなげに浮きくる鮒や野分あと

長き夜の地図に訪なふ百名山

新田 ゆふき

夜長酒ゆくりとはづす魚の骨

栗の実を煮ることもなき侘び住まい

彼岸花潔し今年も白きまま

どこまでも走る長夜の灯の寂し

秋風に骨かと思ゆる朽木かな

安藤 晃二

青空や山査子の実の赤み初む

雨音止みしばし覚醒癩祭忌

野分来と店主束ぬる植木鉢

稔栗の季を引き連れてたわわなる

曼珠沙華の茎直立しみどりかな

中村 晃也

木の実降る民話を語り継ぐ嫗

執刀医のためいきと黙長き夜

カナブンの灯に当たっては死んだふり

長き夜宮部みゆきのページ繰る

長き夜星それぞれのモノローグ

志村 良知

野分去り朝日に躍るランドセル

人肌の色艶めかし彼岸花

玉入れの実況かすか秋の空

木犀の在りか探す鼻と眼と

楽さんを迎へ歌丸長き夜

宮原 凧

たまゆらの吐息のやうな秋時雨  
木の実落つ音一つして堂の昼  
綿のシャツ重ねて羽織る秋の夕  
枕辺に句片散らばる夜長かな  
駅ピアノ空港に聴く秋の旅

内藤 まりこ

うたげはて皿洗う我に月青し  
秋晴れや洗濯物は風が好き  
椎の実に楊枝を立てるこま回し  
明日の寄席ワクワクつる夜長かな  
高齢者運転免許秋寒し

西川 知世とき

尾長二羽野分の後の空囀す  
高階のビルの魂秋入日  
金平糖舌に解ける夜長かな  
捌け道に踏んで木の実のまだ青く  
連れ歩くビニールの傘葛の花

次回は令和四年十一月四日(金)、  
日比谷公園周辺にて吟行の予定。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

十一月は恒例の吟行を敢行、現在、日比谷に移  
っている句会場の傍の日比谷公園となった。吟行  
には囑目(しよくもく)で当日の句を出すという  
のが倣いで、その日の天気などに左右されて、肌  
感覚の句が多く楽しい句座となる。連中が見たと  
ころ、見ていないだろう発見の場所、行き交う人  
の姿などが句になり、「そんなのありました？」  
「同じものを見て作った!」とか句座が弾む。  
囑目について、小林恭二著『俳句という愉しみ』  
に的確な説明があるので、要約すると、

―囑目とは、目に触れたものを俳句にする、い  
わゆる写生を思い浮かべていいが、別に写生でな  
ければならないということもない。挨拶句、眼前  
の風景から離れた句があってもいい。その意味で  
はフィギュアスケートなどで言う自由演技のよう  
なもの。―俳句用語としての「囑目」は「題詠」  
の対の位置にある言葉で、目にふれたものをその  
場で俳句に仕立てることだが、辞書的な答えでし  
かない、囑目をヒントにして連想を飛躍させる。  
とあり、いかに報告性を取り去り、句作者の感  
性を研ぎ澄まし句に写しこむかが勝負である。

一枚の紅葉目つ散る静かさよ 高浜虚子

がうがうと残菊の音したりけり 草間時彦

残菊のなほはなやかにしぐれけり 日野草城

おほばこの葉は未枯れずありにけり 星野立子

身に入むや林の奥に日当りて 岡本 眸

秋惜しむビルの谷間のカフェテラス 林 康子